

女子美術大学アート・デザイン表現学科 3年次・選択

メディアクリエーション演習（〈インタラクティブ〉特別授業）

講義 第6回 実体論から関係論へ
～ 〈インタラクティブな表現〉を基礎づける視点

（2015-12-18）

担当： 石井 拓洋
ishii05042@venus.joshibi.jp

2015
学部3年用

イントロダクション

言語 - 物語 - 認識

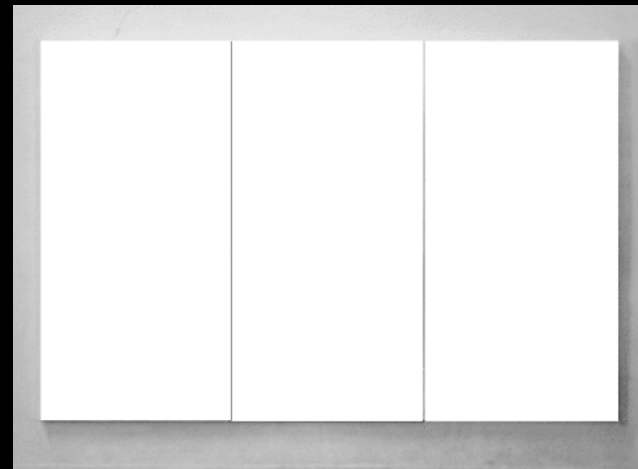


参考映像 + 画像 :
NHK『銀河宇宙オデッセイ 第6集 遡及・ビッグバン』
(1990年11月11日放送) より

モダンアートの帰結 (前回第5回の結論)



ジョン・ケージ《4分33秒》(1952)



ロバート・ラウシェンバーグ《白い絵画》(1951)

啓蒙主義に導かれた

「要素還元主義」、「進歩主義」などを、真摯に可能なかぎり、突き詰めた結果、

音楽に音が無くなり、そして絵画は色と形が無くなり「モノ」となった(1950年代)。

これ以上、自律化・純粹化の方向において、近代主義的な「進歩」は望めない。

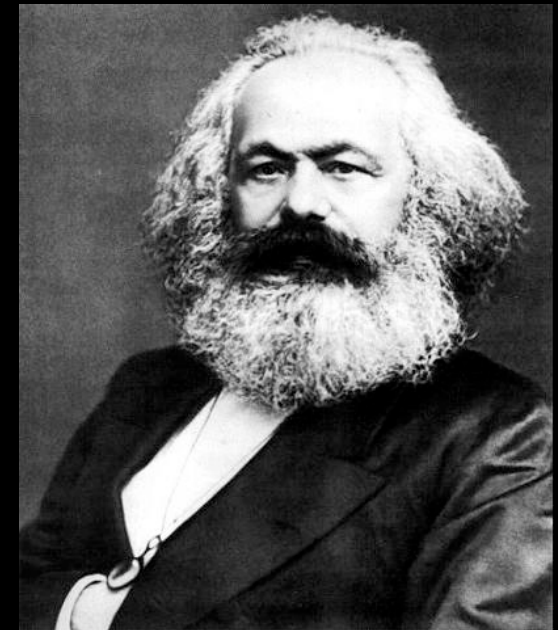
最終回 第6回では、〈脱近代〉をうながした、新たな世界観、つまり、「関係論」的な世界観に視点をうつし、その移行を牽引した代表的な議論を確認してみたい。

今回は〈外界の関係論的な認識〉の端緒としてソシュールの「言語論的転回」、そして〈作家や作品の関係論的な認識〉の端緒としてバルトの「作者の死」に着目する。

「インタラクティブ・アート」もまた、このような、〈関係論的な世界観〉に基づいて現れた文化的営みの一つであることは言うまでもない。
本日の最後に、そのような表現の可能性と限界についてふれてみたい。

関係論をみちびく視点（前史）

カール・マルクス Karl Marx (1818-1883、独)



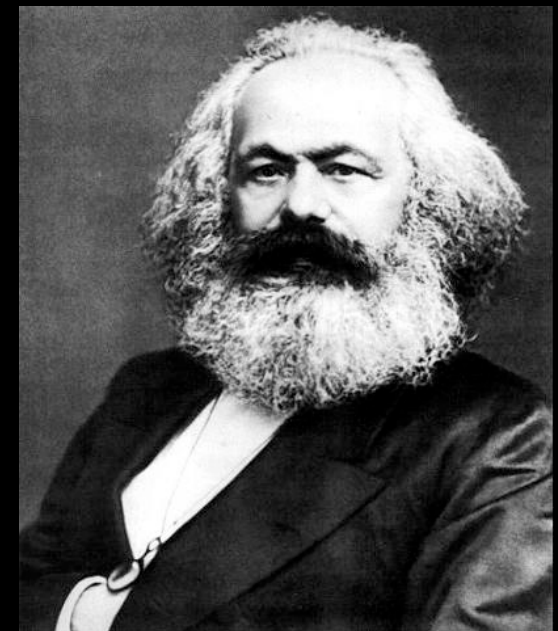
関係論をみちびく視点（前史）

カール・マルクス Karl Marx (1818-1883、独)

「経済的基礎の変化につれて、
巨大な上部構造全体が、、、くつがえる」
[マルクス『経済学批判』13]

→ 経済的基盤（「土台」）に従って
社会や文化（「上部構造」）の在り方が変化する
（「史的唯物論」）

※ ただし「古典的マルクス主義」においては、
逆方向（上部構造 から 土台 へ）は
認めないので、インタラクティブではないが

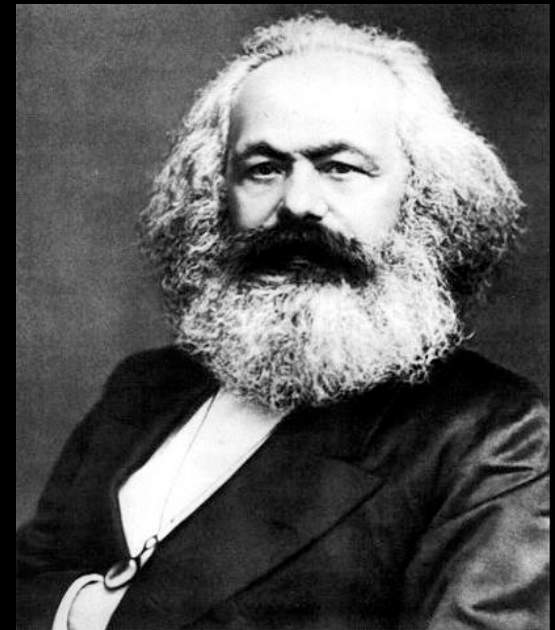


関係論をみちびく視点（前史）

カール・マルクス Karl Marx（1818-1883、独）

「作品を、それが生み出された歴史的条件のなかで解釈するという、現代の批評理論の主要な潮流をなす歴史主義的方向は、(中略)マルクス主義批評によって理論的強度を得たといっているだろう」

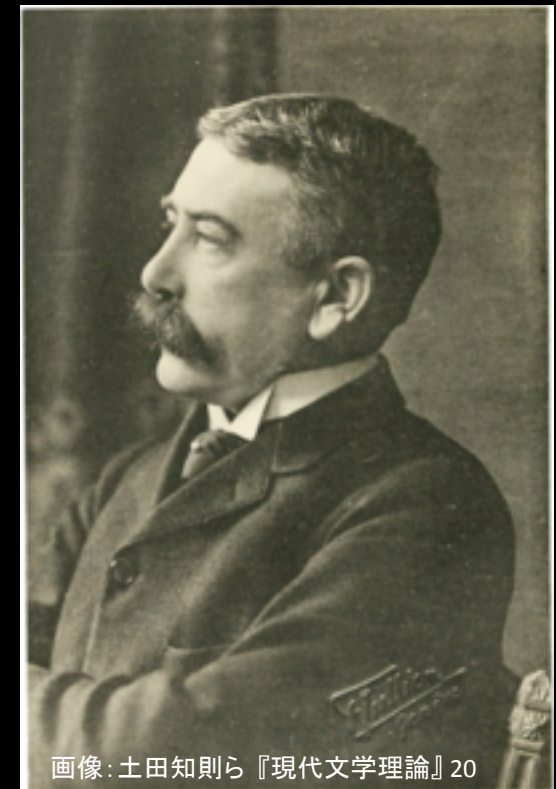
（丹治愛，109）



関係論をみちびく視点 1 : 外界の関係論的な認識へ

関係論をみちびく視点 1 : 外界の関係論的な認識へ

F・ソシュール Ferdinand de Saussure (1857-1913、瑞, スイス)



画像: 土田知則ら『現代文学理論』20

関係論をみちびく視点 1 : 外界の関係論的な認識へ

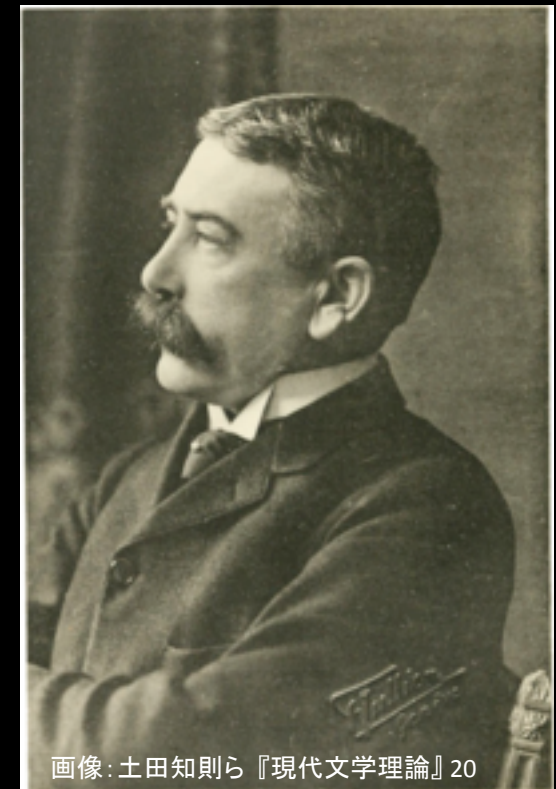
F・D・ソシュール Ferdinand de Saussure (1857-1913、瑞、スイス)

- ・ 言語学者 , 「近代言語学の父」, 構造主義思想の端緒
- ・ 「ことば」は 実在する物事を指す代用の記号ではなくて、むしろ「ことば」によって、人間は物事の認識を得るとの世界認識を示した。



「言語論的転回」 Linguistic turn

20世紀最大の 人文科学上の パラダイムシフト



画像: 土田知則ら『現代文学理論』20

ソシユール以前の考え方

「言語名称目録観」

「貸し」という
概念が先に存在して、、、



あとで「貸し」
という言葉がうまれた

「言語名称目録観」

「借り」という
概念が先に存在して、、、



あとで「借り」
という言葉がうまれた

「言語名称目録観」

でも本当なのか？

「貸し」や「借り」の概念とは、
言葉に先立って存在するといえるのか？

「貸し」概念



日本語 : 貸し

ドイツ語 : mieten

フランス語 : louer

ミッテン

ルウィ

「借り」概念



日本語 : 借り

ドイツ語 : vermieten

フランス語 : louer

ファーミッテン

ルウィ

「もし語というものが、

あらかじめ与えられた概念を表出する役目を受け持ったものであるならば、

それらはいずれも意味上精密に対応するものを、言語ごとにもつはずである。

ところが**事実**はそうではない。

フランス語は『借りる』ことをも『貸す』ことをも無差別に louer (ルウイ) という。

ドイツ語ならば mieten および vermieten と言い分けるところである；

それゆえ 価値の精密な対応はない」

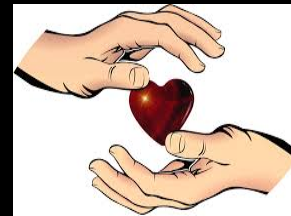
F・ソシュール 『一般言語学講義』小林英夫訳、東京：岩波書店、1940年、163頁。



日本語 : 貸し

ドイツ語 : mieten

フランス語 : louer



日本語 : 借り

ドイツ語 : vermieten

フランス語 : louer

もしも、「貸し」や「借り」などの「行為それ自体」が、
たしかに、言葉に先立って存在するのであれば、

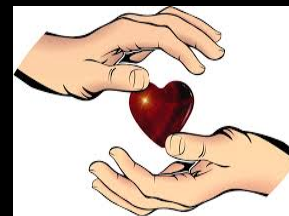
それらを、それぞれ、「違うもの」として示すために、「違う ラベル」が付されるはずである。
しかし、国語によっては、同じであったりする（「貸し」-「借り」のフランス語のように）。

なので、「物事それ自体」が 言葉に先行して存在しているとは言えなくなる。

= 「言語名称目録観」の否定



日本語 : 貸し
ドイツ語 : mieten
フランス語 : louer



日本語 : 借り
ドイツ語 : vermieten
フランス語 : louer

さらに

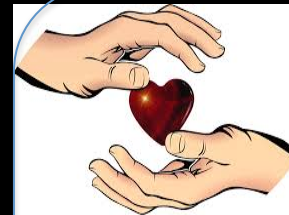
ここから言えることは、例えば、フランス人にとっては、「貸し」も「借り」が個別に存在しているのではなくて、両者は同じ行為に思えた、ということではないか。

つまり、「貸し」や「借り」の区別して、それぞれを別個の概念を作り上げるのは言語と考えることも可能。

フランス語 : louer



日本語 : 貸し
ドイツ語 : mieten



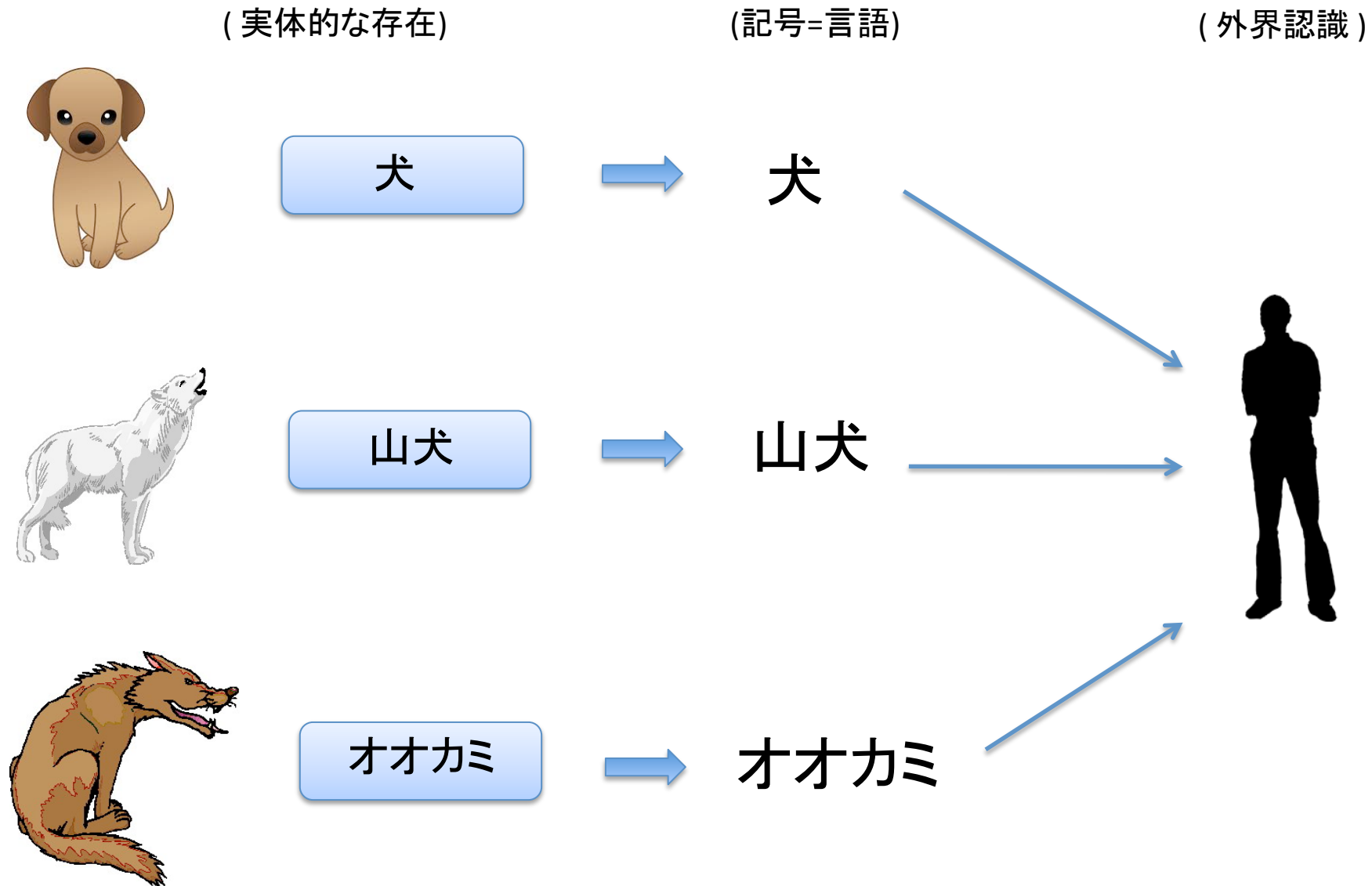
日本語 : 借り
ドイツ語 : vermieten

ソシユール以後 「言語論的転回」

「言語名称目録観」

ソシール以前の外界認識モデル

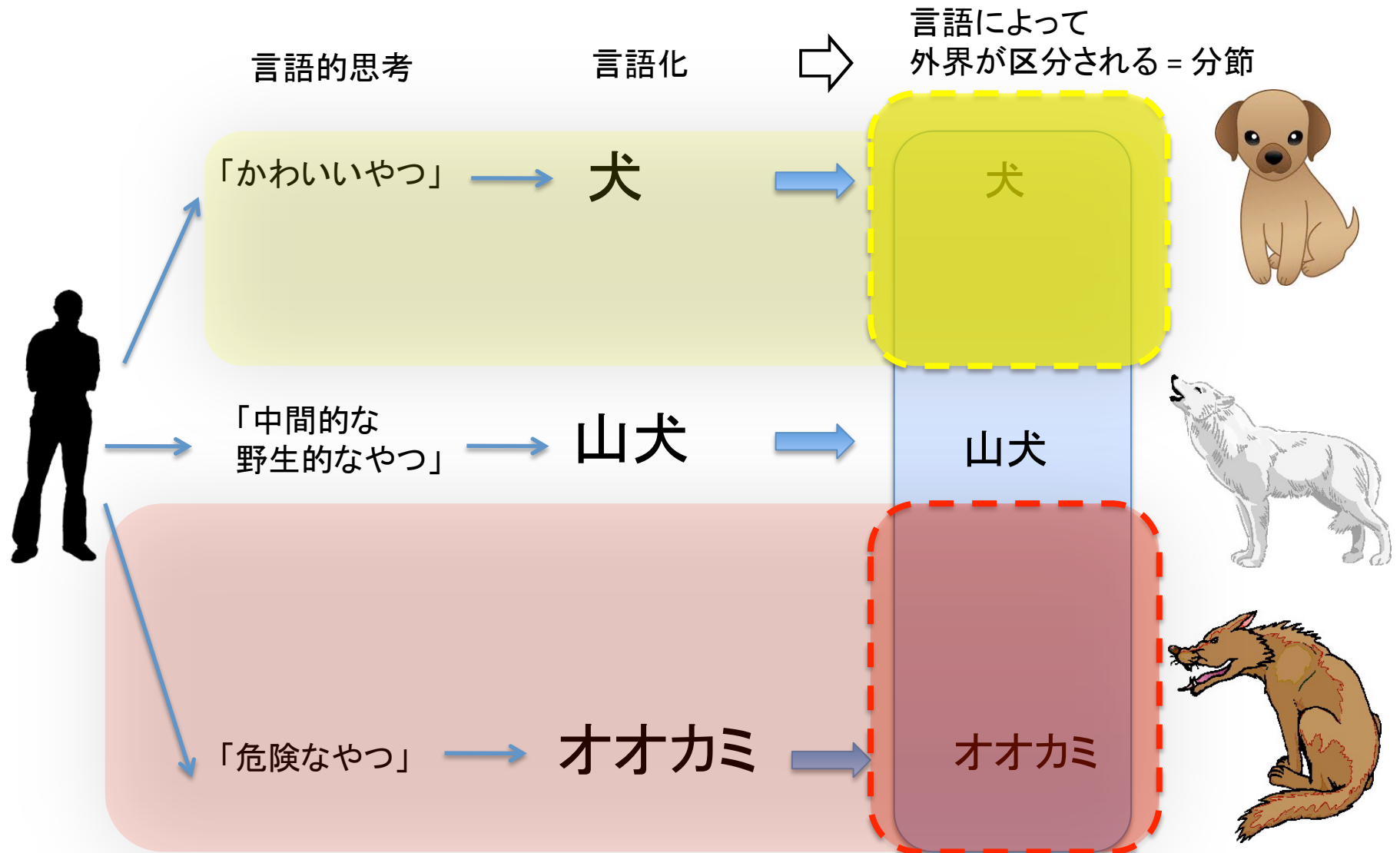
最初に物などが存在する。
人は物にラベルをつける。
それによって外界を認識する



「言語論的転回」

ソシユール以後の外界認識モデル，記号論の視点

人の価値観に基づいて
本来は〈区分別のない〉外界を
記号を用いて〈区分別する〉。
そして外界を認識する。



言語は
関係性（差異）によって
成り立つ

言葉「犬」

と

これ



とのつながりには

言葉「犬」
イヌ

と

これ



とのつながりには

まったく必然性はない（恣意的である）。
なぜなら、地域ごとに様々な〈つながり〉がある。

dog (英) , chien (仏) , hund (独) , cane (伊) , собака (露)

ドッグ

シアン

フント

カーネ

サバーカ

そしてまた、

「いぬ」という言葉における

「いぬ」という「音」や



これ

という「概念」を

示すためには？

音の差異

概念の差異

「いす」×

「いと」×

「きぬ」×

「シニフィアン」
記号表現

「いぬ」

「いに」×

「しぬ」×



これではなく



これ

「シニフィエ」
記号内容



これでもなく

言葉においては
「音」も「概念」も 他との関係による「差異」 によってしか示すことができない

「言語とは差異の体系である」



「ルビンの壺」(多義図形)

図 (?)

地がなければ (図としての差異をつくるものがなければ) 、
図は図として存在できない

関係論をみちびく視点 1 : 外界の関係論的な認識へ

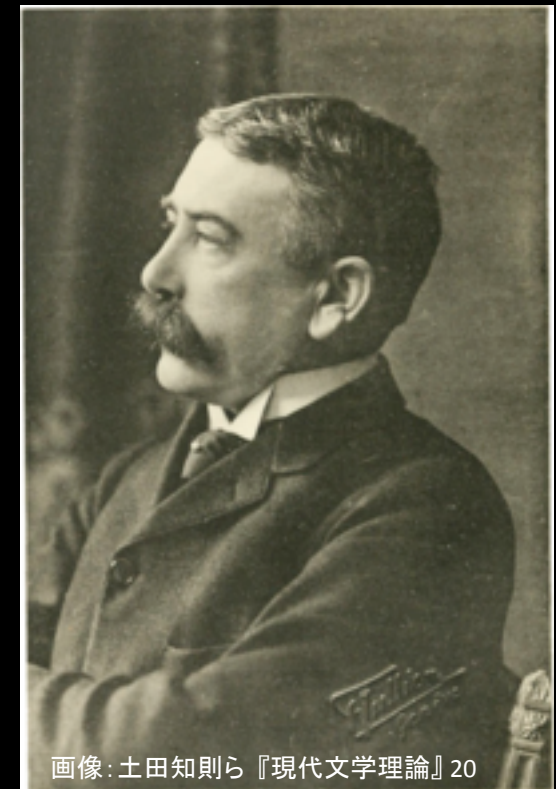
F・ソシュール Ferdinand de Saussure (1857-1913、瑞, スイス)

- ・「言語のシステム全体を、
音の差異と 概念の差異 とが結びついたものと
みなすことができます。

実定的に与えられた概念などどこにもありませんし、
概念と 別個に 決まった 聴覚記号もない のです。

ある概念の差異をある記号の差異とつきあわせることで
一見実定的な項に似たものを得ているのです」

(ソシュール 『一般言語学講義:コンスタンタンのノート』 p.177)



画像: 土田知則ら『現代文学理論』20

関係論をみちびく視点 2 : 作家や作品の関係論的な認識

関係論をみちびく視点 2 : 作家や作品の関係論 的な認識

関係論をみちびく視点 2 : 作家や作品の関係論的な認識

ロラン・バルト Roland Barthes (1915-1980、仏)

- 思想家、批評家。
- ソシュールの言語観を継承し、批評活動をおこなう。



画像: 土田知則ら『現代文学理論』20

関係論をみちびく視点 2 : 作家や作品の関係論的な認識

ロラン・バルト『作者の死』(1968)

「〔作者が〕仮に自己を表現しようとしても、
彼が《翻訳する》つもりでいる内面的な《もの》とは、
それ自体、完全に合成された一冊の辞書にほかならず、
その語彙は他の語彙を通して説明するしかない。
それも無限にそうするしかない」(p.86)



→ 作者や作品が、脱中心化し、関係論的に認識されている

関係論をみちびく視点 2 : 作家や作品の関係論的な認識

ロラン・バルト『作者の死』(1968)



作者は、自己の創造性のみによって創作するものでもなく、したがって、自らの作品の意味を保証するような中心的・優先的な立場とはならない。

「テキストとは、無数にある文化の中心からやって来た引用の織物である」(pp.85-86)

「一編のテキストは、いくつかの文化からやって来る多元的なエクリチュールによって構成され、これら、、、は、互いに対話をおこない、他をパロディ化し、異議をとなえあう。

しかし、この多元性が収斂する場がある。その場とは、、、作者ではなく、読者である。読者とは、あるエクリチュールを構成するあらゆる引用が、一つも失われることなく記入される空間にほかならない。

あるテキストの統一性は、テキストの起源ではなく、テキストの宛て先にある」(p.88-89)

関係論をみちびく視点 2 : 作家や作品の関係論的な認識

ロラン・バルト『作者の死』(1968)



「読者の誕生は、『作者』の死によって
あがなわれなければならないのだ」 (p.89)

「作者」の中心性・優越性が失われ、一方で、
「読者」こそが、作品から多様な意味を生み出さうとする場となる。

→ 「創造的読み」が許された読者の誕生。作品の創造に参加する「読者」。

関係論をみちびく視点 2 : 作家や作品の関係論的な認識

ロラン・バルト 『作品からテキストへ』(1971)



関係論をみちびく視点 2 : 作家や作品の関係論的な認識

ロラン・バルト 『作品からテクストへ』(1971)



作者が意味をつくる「作品」から、読者が意味をつくる「テクスト」へ

「作者は作品の父であり、所有者であると見なされる。
それゆえ、、、文学の科学は、作者の原稿や表明された意図を尊重する」(p.99)

「『テクスト』は、その父親の保証がなくても読むことができる。、、、

『作者』が、、、自分のテクストの中に、《もどれ》ないということではない。
ただ、そのときは、いわば招かれた客としてもどるのだ。

彼〔※＝作者〕の記名は、もはや特権的、父性的、真理論的なものではなく、
遊戯的である。彼はいわば紙の作者になるのだ。彼の人生は、、、一個の創作となる」
(p.100)

関係論をみちびく視点 2 : 作家や作品の関係論的な認識

◀ 前へ 次へ ▶ 1 / 1件

物語の構造分析



モノガタリノコウゾウブンセキ

ロラン・バルト著, 花輪 光訳 (BARTHES, ROLAND.)

東京 : みすず書房, 1987

[Amazon.co.jp](https://www.amazon.co.jp)で詳細を見る

この本に以下が収録

- ・「作者の死」
- ・「作品からテキストへ」

ブックマーク

● 所蔵 :

	巻号	刷年	所在	請求記号	資料ID	状況	予約・取寄	予約人数	備考
1 ☐			相図 : 開架	954 B25	158313		予約	0	

全て選択

選択解除

巻号ブックマーク

まとめ

かつて19世紀の藝術とは、実体論的見地から、自律的な在り方を志向する理念をめぐって、天才としての作者やその作品が議論の対象とされた。

しかし、ソシュールらによる言語論的転回 (1910年代ごろ) を経て、世界における全ての事物および、作者や作品もまた、さまざまな存在間における関係論的な現われとして捉えることに、認識上でのリアルさが見出されることとなる。

このように、20世紀から21世紀の転換期に至りインタラクティブ表現が現れた経緯には、その登場の前提として、18世紀後半にはじまり19世紀に成長をみた西欧近代主義的な価値意識と、それによって生み出された近代ドイツ的な「藝術」概念の存在があり、また、言語学研究上での「言語論的転回」を契機とする「実体論から関係論へ」のわれわれの世界認識に対する「パラダイムシフト」があった。

インタラクティブ・アート その可能性と限界

インタラクティブ・アート：その可能性

- ・それが近代主義的な世界観の批判的な検討の実践である期待

- ・“Cross- disciplinary”な環境から〈新たな言語〉の生成の期待

インタラクティブ・アート：その可能性

- ・それが近代主義的な世界観の批判的な検討の実践である期待

例) 二項対立の超克 (作者 / 鑑賞者など), 自律美学から関係性の美学へ,
反・要素還元主義的 (表現ジャンルの分野横断的傾向など)、、、、

- ・“Cross- disciplinary” な環境から 〈新たな言語〉 の生成の期待

「言語論的転回」以降のわれわれにとって、〈新たな言語〉を見い出すことは、つまり、〈新たな世界観〉を見い出すことと同義である。その意味では、芸術には、そこが〈新たな言語〉の生成の場となることが期待されよう。

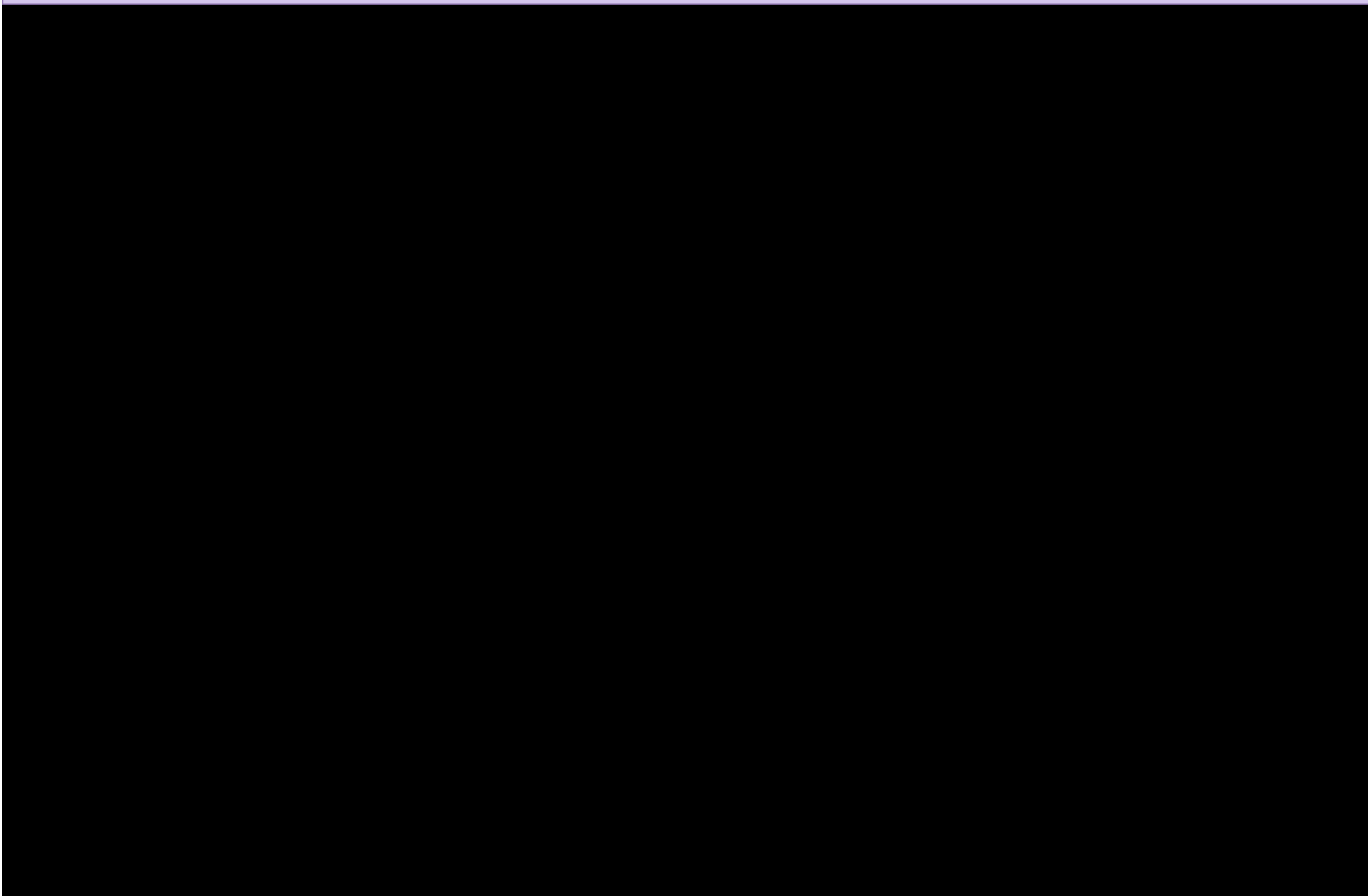
特に、インタラクティブ・アートが生まれる環境とは、他専門分野との出会い、異質なる他者との出会い、刺激をもった試みの場と言える。そのような 分野横断的な環境にこそ 〈新たな言語〉 生成の可能性が秘められている。

最後に、インタラクティブ・アート
に関して批判的に検討すべきと
私が考える論点を2つ挙げておきます。

最後に、あえて、インタラクティブ・アート
に関して批判的に検討すべきと
私が考える論点を2つ挙げておきます。

インタラクティブ・アートの可能性を追究する
立場から、私の2つの論点に対して、可能な
かぎり反論を試みてください。

インタラクティブ・アート：その限界



インタラクティブ・アート：その限界

インタラクティブ・アートは
その表現上の理念によって、
〈権力〉に取り込まれやすい、
かもしれない

インタラクティブ・アート： その限界

インタラクティブ・アートは権力に取り込まれやすい (!?)

インタラクティブ・アート： その限界

インタラクティブ・アートは権力に取り込まれやすい (!?)

1. 作者の意図で注目されるのは、このジャンルの本義ではない (作者の脱中心化) 。
2. 作者は自らの「作者の意図」の主張、表面化 を抑制する。
3. 作品解釈は鑑賞者側 の「創造的な読み」に任される部分が多くなる。

インタラクティブ・アート：その限界

インタラクティブ・アートは権力に取り込まれやすい (!?)

1. 作者の意図で注目されるのは、このジャンルの本義ではない (作者の脱中心化) 。

2. 作者は自らの「作者の意図」の主張、表面化 を抑制する。

3. 作品解釈は鑑賞者側 の「創造的な読み」に任される部分が多くなる。

4. そのため、作品を成立させるべく、いかに観客の参加を促すかに作者の意識はむかう。

5. この帰結は、作品制作の指針として、いずれは、およそ「いかに多くの鑑賞者のニーズに應えるか」という問題へと集約せざるをえなくなる。

6. 参加型が本義のため、5) で述べた傾向は、他ジャンルよりも強く現れることとなる。

7. 悩ましいことは、ここにおいて「作者の意図」たる主張を表面化しえないことである。
つまり、作者の主張が抑制された中で、鑑賞者のニーズに應えねばならない。

インタラクティブ・アート：その限界

インタラクティブ・アートは権力に取り込まれやすい(!?)

8. 作者は主張内容を抑制する。その上で、制作の視点は鑑賞者を魅了する形式的枠組みに向けられる(また、技術的革新性にも向けられる)。
9. ここで観客好みの形式となれば、耽美的でエンターテインメント性を強めることになる。いわば、鑑賞者それぞれの持ち物をいれるための、魅力的で美しい箱をつくることとなる。

インタラクティブ・アート：その限界

インタラクティブ・アートは権力に取り込まれやすい (!?)

8. 作者は主張内容を抑制する。制作の視点は鑑賞者を魅了する形式的枠組みに向けられる (また、技術的革新性にも向けられる)。
9. ここで観客好みの形式となれば、耽美的でエンターテインメント性を強めることになる。いわば、鑑賞者それぞれの持ち物をいれるための、魅力的で美しい箱をつくることとなる。
10. ところで、このような鑑賞者のニーズとは、記号論的視点でいえば、つまり、社会において共有された、その時代・その国での言語 (= いわば〈空気〉) から構築される
11. つまり、主張を抑制された作者は、必然的に、従来の言語 (時代の〈空気〉) の範囲でつくらざるをえない。

インタラクティブ・アート：その限界

インタラクティブ・アートは権力に取り込まれやすい (!?)

8. 作者は主張内容を抑制する。制作の視点は鑑賞者を魅了する形式的枠組みに向けられる (また、技術的革新性にも向けられる)。
9. ここで観客好みの形式となれば、耽美的でエンターテインメント性を強めることになる。いわば、鑑賞者それぞれの持ち物をいれるための、魅力的で美しい箱をつくることとなる。
10. ところで、このような鑑賞者のニーズとは、記号論的視点でいえば、つまり、社会において共有された、その時代・その国での言語 (= いわば〈空気〉) から構築される
11. つまり、主張を抑制された作者は、必然的に、従来の言語 (時代の〈空気〉) の範囲でつくらざるをえない。

反論もとむ

→ 【批判的に検討すべき論点 1】

インタラクティブ作品の作者は、作者性を脱中心化した上で、かつ、多くの人に参加してもらわねばならない。なので従来の言語 (時代の〈空気〉) の範囲に留まりやすい構造 (大衆迎合的な範囲に留まる構造) があるとは言えないか？
それは、芸術に本来期待されること、つまり〈新たな言語〉を生み出すことを模索しにくいものとはならないか？

インタラクティブ・アート：その限界

インタラクティブ・アートは権力に取り込まれやすい(!?)

12. 鑑賞者のニーズに応えるため、また、その参加を促すため、より作品の形式的・技術的側面を洗練させることを追求するならば、いずれ、大きな資本を元にして、企業体として制作せざるをえない規模となる。

インタラクティブ・アート：その限界

インタラクティブ・アートは権力に取り込まれやすい(!?)

12. 鑑賞者のニーズに応えるため、また、その参加を促すため、より作品の形式的・技術的側面を洗練させることを追求するならば、いずれ、大きな資本を元にして、企業体として制作せざるをえない規模となる。

13. つまり、市場経済の枠組への、比較的強い関与が活動の前提となる。

14. 再び、悩ましいことは、ここにおいても、作者の主張を表面化しえないことである。つまり、作者の主張が抑制された中で、市場のニーズに応えねばならない。

インタラクティブ・アート：その限界

インタラクティブ・アートは権力に取り込まれやすい(!?)

12. 鑑賞者のニーズに応えるため、また、その参加を促すため、より作品の形式的・技術的側面を洗練させることを追求するならば、いずれ、大きな資本を元にして、企業体として制作せざるをえない規模となる。

13. つまり、市場経済の枠組での活動を行なうことになる。

14. 再び、悩ましいことは、ここにおいても、作者の主張を表面化しえないことである。つまり、作者の主張が抑制された中で、市場のニーズに応えねばならない。

反論もとむ

→ 【批判的に検討すべき論点 2】

制作の主眼が、形式的・技術的側面（多くの人に参加をうながす枠組み）にむけられ、作者の主張が抑制されたなかで、さらに企業体として、市場のニーズに応えることが求められることとなる。作者の主張を抑制すべき、上のような相対主義の中、一方で、頑強な意図をもつ権力者の意志は、そこに容易に介入しうるのではないか(!?)

そのような大きな資本と権力を取り込んだ「作者」や「作品」(＝大規模なインタラクティブ作品)は、今度は、それ自体が権力へと生まれ変わることはないか。そして、そこに至っては、当初の〈作者/鑑賞者〉の脱中心化の理念とは、まったく逆の状態が現れるのではないか(!?)

以上で、全7回の金曜日講義 を終わります。

提出レポートでは、インタラクティブ表現の作者の立場から、
前述の「論点1」、「論点2」への反論をぜひ試みてください。

そのことで、自己のインタラクティブ表現をより豊かなものとしてください。

主な参考文献・さらなる知識のために

アンソニー・ギデنز (1979 = 1989) 『社会理論の最前線』 ハーベスト社。

池上嘉彦 (1984) 『記号論への招待』 岩波新書 258。

上野千鶴子 編 (2001) 『構築主義とは何か』 勁草書房。

小田部胤久 (2009) 『西洋美学史』 東京大学出版会。

クレメント・グリーンバーグ (2005) 『グリーンバーグ批評選集』 藤枝晃弘訳、勁草書房。

佐々木健一 (1995) 「かたち」 『美学辞典』 東京大学出版会。

菅原教夫 (1992) 『やさしい美術：モダンとポストモダン』 読売新聞社。

テリー・イーグルトン (1983 = 1997) 『新版 文学とは何か：現代批評理論への招待』 岩波書店。

筒井康隆 (1990) 『文学部唯野教授』 岩波書店。

長尾達也 (2001) 『小論文を学ぶ：知の構築のために』 山川出版社。

山下和也 (2013) 『システムという存在』 晃洋書房。

ロラン・バルト (1961 = 1979) 『物語の構造分析』 みすず書房。

主な参考文献・さらなる知識のために

カール・マルクス (1859 =1956) 『経済学批判』 岩波文庫 (白125-0)。

小林康夫、大澤真幸 (2014) 『「知の技法」入門』 河出書房新社。

小田亮 (2000) 『レヴィ=ストロース入門』 ちくま新書 265。

橋爪大三郎 (1988) 『はじめての構造主義』 講談社現代新書 898。

出口顕 (2013) 『ほんとうの構造主義：言語・権力・主体』 NHK出版。

丹治愛 (2003) 『知の教科書 批評理論』 講談社選書メチエ。

川口 喬一、岡本靖正 [編] (1998) 『最新文学批評用語辞典』 研究社。

ジェゼフ・チルダースら [編] (1995=1998) 『コロンビア大学現代文学・文化批評用語辞典』 松柏社。

レイモンド・ウィリアムズ (1976=2002) 『完訳キーワード辞典』 平凡社。

フェルディナン・ド・ソシュール (1911=2007) 『ソシュール 一般言語学講義：コンスタンタンのノート』 影浦、田中訳、東京大学出版会。